

ヴィクトリア朝時代とナイル河谷のイスラーム世界

大塚和夫

1. ヴィクトリア朝時代とふたりのエドワード

エジプトと北スーダンを主なフィールドとして、アラブ・ムスリム世界の社会人類学的調査・研究を行っている筆者にとって、ヴィクトリア朝時代とは、イギリスにおける人類学の制度的基盤が築かれた時期 1884年にエドワード・B・タイラーがオックスフォードの人類学講師に就任、94年に教授となる であるとともに、今日の中東民族誌学・人類学や地域研究に多大の影響を及ぼしているふたりのエドワードと奇しき因縁を持つ時代である。

まず、エドワード・W・レイン（1801--76年）、カイロを中心としたエジプトの民衆生活の包括的な民族誌と呼びうる彼の著書、『当世エジプト人の風俗と慣習』（以下『当世』）が刊行されたのが、1836年12月、すなわち女王即位の前年末である。¹

そしてもうひとりとは、エドワード・W・サイド（1935--2003年）いわずと知れた『オリエンタリズム』の著者であり、ポスト・コロニアル批評を代表する人物のひとりである。生没年からしてヴィクトリア朝時代とは縁もないはずのサイドではあるが、自伝である『遠い場所の記憶』によれば、エジプトで育った彼は、卒業することなく放校処分になったのだが、ヴィクトリア・カレッジという学校に通っていた。女王の名前に因んだこのカレッジこそ、女王崩御の翌年、1902年10月にエジプトのアレキサンドリアに開校したものである。²

ヴィクトリア朝の開始の前年と終焉の翌年に起きた出来事と何らかの関連のあるこのふたりのエドワードは、もちろん直接的な遭遇などはしていない。だが、サイドが論争の書『オリエンタリズム』において、とくに頁を割いてレインを激しく批判したことで、ふたりのエドワードの接点が生じた。

本稿は大きく2つの部分に分かれる。まず、このふたりのエドワードの論

争点、正しくいえばサイドのレイン批判点に着目し、それがテキスト研究とフィールド研究、さらに「文化的他者」の表象をめぐる議論などにおいてもつ意味を検討する。

次に、「文化的他者」の実定性を肯定する（歴史）人類学的立場から、ヴィクトリア朝時代のイスラーム世界、とくに1880年代のナイル河谷（現在のエジプトとスーダン）に生じた2つの運動にふれ、それらが現在アラブ・ムスリム世界などで活発な議論を呼んでいる、ナショナリズムおよびイスラーム主義の問題と関連している側面を紹介したい。それは、ヴィクトリア朝時代に高揚したイギリス帝国主義の侵略に対し、ほぼ同じ時期にナイル河谷に生まれながらも異なった方向性をもった抵抗運動の事例を提供するとともに、そのような歴史的事件のもつ「今日性」の一端にふれるものにもなるだろう。

II. テキスト批判とフィールド調査

1. エドワード・W・レインと『当世』書

E・レインの東洋学者としての業績には、クルアーン（コーラン）や『千夜一夜』の抄訳、そして浩瀚な『アラビア語・英語語彙集』があるが、もっとも世間に知られているのが、先に記した『当世』書である。それは、1825～29年そして33～35年にかけて、カイロを中心としたエジプトでの生活を通してえた直接的情報に基づいて執筆されたものである。衣食住から宗教、娯楽、民間信仰、年中行事、通過儀礼など広い範囲にわたり、当時のエジプト民衆の生活実態を詳細に記述した報告である。その「民族誌的」価値には計り知れないものがある。また、多数収録されているレイン自身が描いた挿画も、きわめて貴重な当時の画像資料である。³

本稿は『当世』書の東洋学さらには中東民族誌学・人類学的脈絡での評価を論じるものではない。ここでは、当時のイギリス読書界における同書の位置に関する若干のコメントを紹介するにとどめよう。

ジョン・バーレルによれば、エジプトや東洋に関する西洋のイメージを「発明」し続けた「紀行書」、ナイル水源の探求などといった「探検書」、さらに読者層を広げつつあった「考古学書」と対比して、レインの『当世』は「社会人類学書」 当時、そのような学問分野は存在していなかった

ので、アナクロニズムの用語であると断りながら というジャンルに属する。そして、個人的印象に基づき露骨な差別主義 エジプト人を「動物」などに喩える の表出を隠さない「紀行書」などと比較すれば、たとえ西洋の優位という観念が潜んでいたとしても、「社会人類学書」や「考古学書」は科学的であることを志向し、非人格的記述を試みていたと評価する。⁴

一方、『当世』は当時のイギリス社会でどのように「消費」されていたのだろう。同書は、実用知識普及協会 (Society for the Diffusion of Useful Knowledge)の後援で刊行されたところから、当初から学術書というよりは、一般の読者を意識していた。そして、1836年の初版以降、何度も版を重ねているので、実際に広く読まれていたことが分かる。1841年の半島・東洋蒸気船会社のスエズ上陸許可獲得以降、エジプトへの観光客は着実に増えた。ジェフリー・ローパーによれば、彼/彼女らは『当世』、さらにはレインが抄訳した『千夜一夜』 ヴィクトリア朝の性規範に合わせた、慎重な翻訳であったにもかかわらず を参照し、アラビアン・ナイトのイメージを脹らませながらエジプトを訪れた。⁵ その意味において、同書はイギリスにおけるツーリズムの高揚と結びつき、東洋趣味（オリエンタリズム）の喚起に貢献したといえるであろう。科学性を保ちながら東洋趣味を掻き立てる同書の特性、それがサイドのレイン批判につながってくる。

2. エドワード・W・サイドのレイン批判

サイドによれば、オリエンタリストの学識の中に、「オリエントに居住し、オリエントと現実の実存的接触をもったという独特の押し付けがましい事実によって、自らの正統性を主張するという」伝統があった。⁶ その伝統には、専門的オリエンタリズム（東洋学）に素材を供給しようとするもの、前者と同じ意図をもちつつ、しかし個人的意識の奇矯性と様式＝文体（スタイル）とをテキストの中に保持したもの、オリエントへの現実もしくは比喩的旅を、みずからの心に宿る美意識の表出の試みとみなすものの3つの傾向があった。レインはその最初の傾向を代表する人物と位置づけられる。ちなみに、この傾向の例としては学者で探検家のリチャード・バートン、このそれには文学者のジェラルド・ド・ネルヴァルがあげられている。

サイドのレインに対する批判、いや非難とでもいうべきものは、レインが「現地人の間にもぐりこみ、彼らと同じように生活し、彼らの習慣に順応することができ」たといいつつ、実際には、「冷静な英語の散文によって描写するのに必要な距離までしか、ムスリムの行動様式のなかに入っていかうとしな」かったこと、そして、エジプト人との「友情を裏切ったことなどまったく気にかけない」でいたことに向けられる。⁷

このようなエジプト人との距離は、レインがエジプト人の友人からもちかけられた結婚話を固辞したところにも現われていると、サイドは主張する。サイドによれば、このようにしてレインは「オリент社会の子孫増殖過程からきっぱりと文字通りの離脱を果」し、結果として「彼は偽りの関与者としてのみずからの権威的アイデンティティを確保し、自分の物語のもつ客観性を支えること」になったのである。⁸

このようなサイドのレイン批判はどのように受け止められているのか。例えばジョン・ローデンベックが提出する疑念は、サイドはレインのテキスト全体を読んではいないのではないかというものである。実際、サイドが主に論難を浴びせるのはレインによる序文であり、本文への言及はわずかなものに過ぎない。そしてローデンベックは、全体を精読していたら行わないであろうと思われる、恣意的な読解や引用の箇所をいくつも指摘している。⁹

ただ、サイドのレイン批判の射程は、そのような文献読解の問題にのみ還元されるものではないと思われる。いわば「フィールド派」オリエンタリストに対するサイドの批判は、フィールドワークに基づく参与観察を重視する20世紀、つまり「マリノフスキー」以降の人類学のあり方に対する根本からの批判にもつながるものなのである。¹⁰

3. 「オリエンタリズム」批判と人類学

サイドの『オリエンタリズム』に対する批判としてはさまざまなものがある。そのうちのひとつとして、西洋のオリエンタリスト（東洋学者）たちのテキストが帝国主義の利害に従って「歪められた」オリエント像を提出していると非難するのならば、サイドは「真の」オリエント像を提出する準備があるのかというものがある。しかしおそらく、サイドはそれを自分の仕事と考えていなかった。オリエント出身の人間であるからといって、サイドは自分が「真正な」オリエントを表象できるとは考えて

いなかったであろう。シェリー・ワリアが指摘しているように、「土着の文化を描こうとすれば、どうやっても逆向きのオリエンタリズムになって」しまう。むしろ西洋によって「作り上げられた東洋像に含まれる歪みを見つけたしながらも、東洋の側で作り直されたものも疑わしいと認めている点で、サイドは賞賛に値する」と考えるべきであろう。¹¹

民族誌や「異文化表象」に関する問題を、人類学に内在した視点から積極的に批判するジェームズ・クリフォードは、『オリエンタリズム』の書評論文において、「サイドはしばしば、テキストや伝統がオリエントの現実の、あるいは真正の特徴を歪曲し、支配し、あるいは無視することを示唆する。けれども別のところでは、いっさいの『本当のオリエント』の存在を否定している。・・・オリエンタリズムが作り出す非真正さには、いかなる真正さによっても応じることはできないのだ」と述べている。¹² ここで素朴実証主義的な人類学者に対して、驚くべきことが主張されている。ワリアやクリフォードに従えば、サイドは「真正な」オリエント（異文化）など存在しない、少なくとも表象しえないと主張していると思われるのである。

人類学者、いや何らかの形で実証的(positive)姿勢を採用している人文・社会科学者は、このようなサイドの理論的立場に対しどのように反応すべきなのであろうか。紙幅の限定もあり、ここでは2点だけを簡単に指摘しておきたい。ひとつは「他者」の表象可能性に関するものであり、もうひとつはテキスト資料とフィールド資料の相違点に関わるものである。

実証的学問分野は、何らかの形で対象を実定的(positive)なものとして測定して議論を進めなければならない。例えば、ヴィクトリア女王の生涯、個々の事績に関しては、さまざまな解釈・評価などが可能であろう。だが、彼女が実在していたことそのものを否定することは実証的歴史学にはありえない。その意味でヴィクトリア女王は「実定的な」存在である。もちろん、彼女の行動や思想に関してはさまざまな解釈があり、どれが唯一の真実であるかを見極めることが難しいものもある。いや、おそらく「唯一の真実」すなわち「唯一の真正性」など存在しない、いや決定しえないかもしれない。しかしそれでもわれわれは女王の「歴史的事実」を明らかにするために、新しい史料を発掘し、それに基づく解釈・評価を仮説的に提示し、学会などの公共的場においてそれを論証もしくは反証する機会を保証している。その意味において、ヴィクトリア女王をめぐる実定的な「歴史的事実」

は客観的 = 相互主観的に確立される。ただそこで確立されたものも、さしあたりの事実であり、新しい史料や解釈によって反証され、修正される可能性を常にもつ「開かれた仮説」であることを忘れてはならないが。

もちろんこのような公共的議論を保證すべき場が、政治とまったく無関係であるというわけにはいかない。サイドのオリエンタリズム批判の衝撃は、そのような場に潜んでいる政治性を鋭く剔抉したところにある。しかしながら、だからといって研究対象の実定性を全面的に否定するところにまで至る必然性はない。少なくとも「近代的」学問の枠内では、サイド自身、パレスティナに関しては、ここでいう「実証的な」テキストを書いているのである。¹³

いまひとつ考えなければならないのは、フィールドとテキストの異同の問題である。サイドの『オリエンタリズム』は、徹底的にオリエンタリストのテキストに執着した仕事である。いわば、彼はレインの『当世』を含む膨大なテキスト群を「消費」し、それに基づいて新たな刺激的テキストを生産したのである。

一方、レインの流れに乗る民族誌学は、書かれたテキストではなく、フィールドでの「経験」に基づいて民族誌というテキストを「生産」する学問領域である。このようなフィールド経験に基づいて書かれたテキストの「権威」のあり方については、すでにクリフォードの鋭い批判的論考がある。それによれば、「マリノフスキー」以降の人類学には、まず「自分（人類学者）はそこにいた」という「フィールド経験」を根拠にして、読者にも「あなたはそこにいる」という臨場感をもたらす民族誌のスタイル、being there を根拠とする「民族誌的権威」の確立の仕方がある。だがその後、クリフォード・ギアツに代表される「解釈人類学」パラダイム、さらにポストモダン人類学の中には「対話と多声性」に基づく「言説的」パラダイムなどが登場してきた。¹⁴ いわば素朴な「現場第一主義」的な、being there のパラダイムは、いまでは唯一の民族誌的権威ではなくなってきたのである。

とはいえ、「解釈人類学」も、「対話と多声性の民族誌」も、著者の存在を認めている。そしてその著者たちは、何らかの形でフィールド経験に基づき、「異文化」を表象しているのである。その意味では、レインの「フィールド経験」を全面的に否定することは、批判的民族誌学においても首肯されてはいないと考える。¹⁵

テキスト解読の経験とフィールド経験とは別な種類の経験であり、異なった種類（と受けとめられる）テキストを生産する。フィールド経験に基づいて生産されたテキスト（民族誌）が、紋切り型の「異文化」像、さらにはその読者層のもつ既存のイメージにこびる「オリエンタリズム」的特性に侵蝕されている可能性は常に存在する。だがそれと同時に、既存のテキスト類には見出せない、新たな文化的他者像　それは時にはノイズ、テキストの乱れなどとして現出するかもしれない　が潜んでいる可能性も否定できない。一方、既存の、「自文化」で流通しているテキストの消費にのみ拘泥する立場は、「知的内閉化」に至る危険性をもつ。そのような知的内閉化を打破するひとつの手段として、「フィールド経験」は有効なもののひとつであろう。「現場」体験というものが、たとえ「神話」であったとしても、「新しいテキスト」を生産し、読者に提供するという目的を達成するために、今でも賭けるに値する何かであるという信念が、民族誌学を存続させているのである。

ふたりのエドワードの理論的確執に関わる議論はここで終えたい。次に「実定的」な歴史的出来事として、ヴィクトリア朝時代のナイル河谷にみられた2つの運動を紹介したい。

III . 1880年代のナイル河谷

1 . エジプトのウラービー革命

サイドにより、近代的オリエンタリズム生成の重要な契機とされた1798年のナポレオンのエジプト遠征。短期に終わった仏軍占領後の混乱を収め、治安を回復したのがオスマン朝から派遣されたアルバニア出身の軍人、ムハンマド・アリーであった。マムルーク（奴隷軍人）勢力などを押さえつけて1805年に政治的実権を掌握した彼は、オスマン朝から実質的に独立状態になったエジプトを西洋的に近代化し、国力の増進に努めた。

その方針は彼の創設した王朝の後継者たちにも引き継がれた。だが、19世紀も後半になると、王室主導の放漫な近代化政策はさまざまな歪みをもたらし、エジプト政府はその財源をヨーロッパ諸国に頼るようになった。1869年に竣工したスエズ運河の株も、財政難から75年にはイギリスに売却せざるをえなくなった。76年にはエジプト財政はヨーロッパ諸国の管理下に置かれ、イギリス人が財務、フランス人が公共事業を担当するようにな

った。

英仏によるエジプト財政の管理、それに伴う政治・経済活動におけるヨーロッパのプレゼンスの増加、それに加えてトルコ・チュルケス系の王族・支配層に対する土着のアラブ系エジプト人の不満などが高まってきた。その気運の中で、エジプト人主導のナショナリズム運動が生まれ、活発化してきた。そして81年1月に、エジプト農村出身のアフマド・ウラービーらの軍人が、ヘディーヴ 副王、実質的に独立状態であったが、オスマン朝の形式的支配を認めていた当時のエジプトの支配者=王の称号 であったタウフィークにチュルケス系の戦争大臣の罷免を求める請願書を出した。それに対し政府はウラービーらへの抑圧策で応じようとした。

ウラービーらの運動と政府（その背景の王室そしてヨーロッパ勢力）の対立は深まり、81年9月にウラービーは軍を動員して王宮を囲み、ヘディーヴにナショナリスト主導の内閣の承認を求め、それを勝ち取った。ウラービー自身も戦争相に任命された。

82年に入ると、英仏の干渉が激しくなった。同年5月、両国は市民的秩序が脅威に曝されているという名目のもと、アレキサンドリアに向けて軍艦を派遣した。7月、英軍はアレキサンドリアを艦砲射撃で攻撃し、ナショナリストからなるエジプト政府はイギリスに宣戦布告をした。しかし、ヘディーヴはイギリス側についた。9月中旬にナイル・デルタのタッル・アル=カビールで起きた英軍との戦闘でウラービー側は壊滅的打撃を受け、革命は挫折した。エジプトはイギリスの軍事的占領下に置かれることになり、ウラービーはセイロン島に流刑となった。

このようなウラービー革命の特徴は、何よりもそれが「エジプト人のためのエジプト *miṣr li-l-miṣriyīn*」をスローガンとする、エジプトで最初の本格的なナショナリズム運動であった点である。それは、英仏をはじめとするヨーロッパ列強や、エジプトの支配者でありながらもオスマン帝国領出身でアラビア語を満足に話せない者も多かった王族ら外來の支配層に対抗する、アラビア語、とくにそのエジプト方言を日常的に話す土着エジプト人を母体とした抵抗運動であった。¹⁶ ウラービー自身、運動勃発の2年ほど前に結成されたナショナリスト政党、アル=ヒズブ・アル=ワタニーの黨員であった。

この政党名は一般に「国民党」と訳されており、国民にあたる言葉はワ

タン　ワタニーはその形容詞形　である。アラビア語でネイションにあたる言葉には、このワタンの他にカウムがあり、ナショナリズムの場合はそれぞれワタニーヤ、カウミーヤとなる。両者の相違は、一般に、ワタンは地域（領域、地縁）的つながりを強調し、カウムの場合には（想定された）系譜（血縁）的つながりを重視するところにある。したがってウラービー運動のナショナリズムは、外来者（英仏、トルコ系支配者）を排除する傾向をもつ、エジプトに住む土着の民を主体とするワタニーヤの運動であった。その点で、20世紀中葉にナセル（ガマル・アブドナーセル）大統領が唱えた、エジプト国民に限定されない、汎アラブ主義的カウミーヤとは異なる。

ウラービー運動は近代的軍制によって養成された軍人が指導するナショナリストの運動であった。だが、そこにはムハンマド・アブドゥラ伝統的イスラーム学者たち（ウラマー）も積極的に参加し、英仏に対するジハードを宣言してウラービーらと共闘した。だが、20世紀に入って生じた反英運動、1919年革命などになると「世俗主義的」なナショナリズム色がいっそう強まり、ウラマーの影響力は限定されるようになった。

ウラービーが王室に請願書を出した1881年、ナイルの上流、現在のスーダン共和国の地でも外来の支配者に対する抵抗運動が起きた。しかしその運動は、エジプトのそれとはかなり性格を異にしたものであった。

2. スーダンのマフディー運動

アラビア語の史書にピラード・アッ＝スーダーン（黒人の地、くに）と記されているサハラ沙漠南方の帯状の地域、その東部をナイル川が走っている。エチオピア高地から流れる青ナイル、そしてヴィクトリア湖¹⁷周辺を水源とする白ナイルが合流する地点、そこが今日のスーダン共和国の首都ハルトゥームである。整然とした都市計画に基づく同市は、19世紀に植民地都市として建設された。

前述のように19世紀初頭にエジプトの権力を掌握したムハンマド・アリーは、北方の東地中海地域（オスマン帝国領シリア）とともに、南方のスーダンにも遠征隊を派遣した。シリア方面における領土拡張はヨーロッパ列強の干渉によって挫折したが、ナイル上流地域はそのままエジプトの植民地としてとどまった。その際に、植民地支配の拠点として建設されたの

がハルトゥームなのである。

1820年にスーダンに侵攻したエジプト軍は、青ナイル沿岸のセンナールを首都としていたフンジュ・スルターン国を滅ぼし、今日のスーダンの北部・東部を支配下に置いた。だが、ナイル沿岸の農民に課した重税の結果、多くの農民が離村してスーダン南部で奴隷交易に従事した。しかし、イギリスの影響下に奴隷交易禁止などの措置がとられ、スーダン土着の民の不満が高まり、エジプト、およびその背後にいるイギリスなどの「ヨーロッパ・キリスト教徒」勢力に対する反発を醸し出していた。¹⁸

エジプトでウラービーらがヘディーヴへ請願書を出したのが1881年1月。その2ヶ月後、白ナイルのアバー島でサンマーニー・スーフイー（イスラーム神秘主義）教団の指導者であったムハンマド・アフマドは、夢の中で預言者ムハンマドから告げられたとして、みずからマフディーであることを腹心の弟子たちに打ち明けた。マフディーとはアラビア語で「正しく導かれた者」を意味し、この世の終末の前に地上に正義を実現するために登場するメシア、救世主を指す。このような考え方はイスラームではすでに7世紀末にはみられ、シーア派では指導者（イマーム）概念と結びつき中心的教義の一面を占めてきた。スンナ派でも体制批判運動の中などで、マフディーはしばしば出現していた。

すでに19世紀前半において、西アフリカ、アルジェリア、そして上エジプトなどでマフディーを称する人物によって率いられた反体制、反植民地運動がいくつも起きていた。植民地化される前夜の社会的混乱を終末が近づいた徴と受け取り、不正を糾し正義を実現してくれるマフディーに対する期待が、アフリカのムスリム民衆の中に高まっていたのである。さらに、ムハンマド・アフマドが蜂起した時期は、イスラーム（ヒジュラ）暦13世紀の「世紀末」にもあたっていた。¹⁹

そのような「黙示録的」雰囲気为背景に、ムハンマド・アフマドはマフディーであることを1881年6月に公然と宣言し、スーダン各地の宗教勢力に対し、自分のもとに結集することを求める手紙を出した。それを危険視したハルトゥーム政府は、ムハンマド・アフマドを逮捕するためアバー島に軍を派遣した。人数の上では劣っていたのにもかかわらず、マフディー側は政府軍を打ち破った。後のマフディスト（マフディー支援者、アラビア語ではアンサール）側の歴史書では、同じように数で劣っていた預言者

ムハンマドがメッカ勢力を破ったバドルの戦役（624年）と、このアバー島での勝利を重ね合わせている。

初戦に勝ったとはいえ、アバー島にとどまっていたのは危険と判断したマフディー側は、西方のコルドファーン地域に転進した。この行動はヒジュラと呼ばれており、それも預言者がメッカからメディナに逃れた故事（622年）と重ねられている。次第に支持者を増やして軍事力を強め、コルドファーン地域の中心地エルオベイドを奪取したマフディー勢力に対し、エジプトのヘディーヴ、タウフィークは、インドで30年間軍務についていたイギリス軍人ウィリアム・ヒックスを司令官とする討伐軍を派遣した。しかし、ヒックス軍はエルオベイド南方にあるシャーカーンの地での戦いで敗北を喫した（83年11月）。この戦勝によりマフディー軍のスーダン西部での地位は確立し、彼らはより西方のダールフル地域、南方のパフル・アル＝ガザル地域などにも進出した。さらに、紅海沿岸に暮らすベジャ系牧畜民の中にも支持者を増やした。

すでにウラービーらの運動を鎮圧し、エジプトの権力を握っていたイギリスは、84年1月にチャールズ・ゴードン將軍をスーダン総督に任命してハルトゥームに派遣した。ヴィクトリア朝時代の偉大な英雄のひとりとして知られるゴードンは、1860年代には中国の太平天国を破った常勝軍の指揮者であり、70年代にはスーダン統治にも関わっていた。だがゴードンは、マフディー側との妥協に成功せず、85年1月のマフディー勢力のハルトゥーム攻撃によって「悲劇的な英雄」として命を落とした。²⁰

ハルトゥーム奪取後マフディーは、同市と白ナイルを挟んだ対岸のオムドゥルマンを拠点に、独自の国家体制を建設しようとした。しかし、その半年後、85年6月に彼は急逝した。チフスが死因であったとされているが、毒殺という噂も流れた。新国家の実権は、マフディーの高弟である、コルドファーン地域の牧畜民、バグラー部族出身のアブダッラーヒが掌握した。彼は生前のマフディーによって第1ハリーフ、いわゆるカリフ、これも預言者ムハンマドの死後、イスラーム共同体の政治的指導者に与えられた称号であるに任命されていたのである。ナイル沿岸地域出身のマフディーの一族との内紛などもあったが、アブダッラーヒはスーダンの中部・北部の支配権を確立し、独自の国家体制を維持した。

カイロでの地歩を固めていたイギリスは、東方や南方からスーダンへの

進出を図るイタリア、ベルギー、フランスなどの動きに危機意識を強め、96年3月にイギリス・エジプト連合軍によるスーダン再征服を開始した。指揮官はホレイシオ・H・キッチナー。連合軍はナイル川にそって南に進み、98年9月にはオムドゥルマーン郊外、カラリーの地での戦闘でマフディスト軍に圧勝し、スーダンを再征服した。おりしも南スーダンのファシヨダに進駐したフランス軍の撤退を求め、交渉に成功したイギリス政府は、99年にエジプトと協定を結び、イギリス・エジプト共同統治という植民地体制を築き上げた。

さて、このマフディー運動の位置づけであるが、今日のスーダン国民史のレベルでは、スーダン・ナショナリズム運動の先駆としての「マフディー革命」と評価されている。外来支配勢力（エジプト、イギリスなど）の排除を目指す土着の民の運動という意味では、確かにこの運動はナショナリズムという側面ももつ。だが、マフディーらが運動の主体と考えていたものはスーダン・ネイションとはいいがたい。

マフディストらの言説を分析すると、彼らは運動をムハンマド・アフマドをマフディーと認める「真正の」ムスリムと、それは認めない「不信仰者」の中には、マフディーを批判したエジプト人ウラマーなども含まれる間の戦い、すなわち「正しい」イスラームのあり方をめぐる戦闘であったと考えていたことが分かる。同じ年に起きたエジプトのウラービー革命が近代的教育を受けた「軍人」を指導者とし、「エジプト人」を主体とする「ナショナリズム」運動とみなすことができるのとは対照的に、スーダン・マフディー運動は伝統的イスラーム教育を受けた「宗教指導者」を奉じた、「正しいムスリム」が主体となった「宗教運動」という側面を色濃くもっていたのである。換言すれば、イギリス・エジプト共同統治体制によって確定され、独立後も引き継いだ「国境」内に居住する住民全体を主体とする「スーダン国民」は、マフディー運動の時期にはまだ自覚化されていなかったと思えるのである。

このようなほぼ同時代に起きたエジプトとスーダンでの抵抗運動の性格の相違は、19世紀後半におけるナイル下流のエジプトとその上流のスーダンにおける「西洋近代」浸透度の相違を反映しているのであろう。別な言い方をすれば、「近代的」人造物であるナショナリズムという「モジュール」が、すでに移植されつつあった前者と、そうではなかった後者という側面からも説明できると思われる。²¹

IV．後日譚　　結びに代えて

最後に、ヴィクトリア朝時代にナイル河谷で起きたこれらの事件が、その後のイスラーム世界の出来事とどのような関係をもっているのか、その点についていくつかのトピックに限定して紹介しておきたい。

最初にふれたいことは、マフディスト国家崩壊後のスーダンの状況である。イギリス・エジプト共同統治体制において、初代の総督となったのはキッチナーであった。だが、彼は1899年12月には南アフリカ戦争（ボーア戦争）支援に派遣された。その後を襲ったのがレジナルド・ウィングイトであり、青と白の2つのナイルに囲まれたジャジーラ地域の農業開発などを推進した。彼は1916年にその職を辞した後に、エジプトの高等弁務官となった。彼はかつてエジプト軍制にも参加しており、現地の事情に通じ人脈もっていたのである。

第1次世界大戦終了直後、ウィングイトはサアド・ザグルールらから面会を求められ、その場でエジプトの独立やパリ講和会議への出席という彼らの希望を聞かされた。だが、ザグルールらの要求は、最終的にイギリス当局から拒絶された。それを不満としてエジプトでは、ウラービー革命に続くナショナリストによる大規模な反英蜂起である1919年革命が起きた。それが22年のイギリスによるエジプト独立承認の宣言につながるのである。

だがそれでも、イギリスはスエズ運河の権益を手放さなかった。それをエジプト人が完全に奪取するのは、52年のエジプト革命を経て実権を握ったナセルがスエズ運河国有化を宣言し、スエズ戦争（第2次中東戦争）に耐えた後の57年のことであった。それは同時に、イギリスのエジプトにおける植民地的支配の終幕を告げる出来事でもあった。

エジプトのナショナリストの系譜は、ウラービー、サアド・ザグルール、ナセルなどを経て現在のムバラク体制へと続いている。それと並行した形で、イスラーム主義運動の系譜もみられる。それはムハンマド・アブドゥとラシード・リダーのサラフィー主義、ハサン・バンナーのムスリム同胞団、そして1970年代以降活発化した急進主義（いわゆる原理主義）の活動家などへとつながるものである。²² このようなイスラーム主義者のイデオロギーの中には、19世紀のスーダン・マフディズムと共通した特徴を見

出すことが可能である。それは初期イスラーム時代の理想視、シャリーア（いわゆるイスラーム法）に基づく国家・共同体秩序の確立、そして最近の一部の急進派にみられる、みずからの奉じるイスラームのあり方を認めない者はたとえ国家指導者やウラマーであっても不信仰者と宣言して殺害も正当化するタクフィール（不信仰者宣告）思想などである。²³

この系譜を遡れば、今日のサウディアラビア王国の国教となっている、18世紀のアラビア半島で生まれたワッハーブ主義にも至る。ワッハーブ派はそれが誕生した時点で、半島に暮らす「誤った」ムスリムを「正しい」ムスリムに「回心」させるために、過激な軍事的キャンペーンを展開した。その勢いは凄まじく、19世紀初頭にはイスラームの2大聖都、メッカとメディナを一時的に支配下に置いた。ワッハーブ派を聖都から追放したのは、オスマン朝の指令を受けたエジプトのムハンマド・アリー軍の軍隊であった。

さて、レインがエジプトに初めて足を踏み入れた1825年には、すでにワッハーブ派は聖都から追放され、壊滅状態になっていた。だが、そのピューリタンのともいえるイスラームの捉え方は、軍事的急進主義には同調しないムスリムにも思想的な影響を与えていた。レインの評伝を刊行したレイラ・アフメドは、レインが『当世』においてスーフィー教団の活動やムスリム聖者に対する民間信仰を「宗教と法」の章ではなく、「迷信」や「公共的年中行事」の章に入れていることが、ワッハーブ主義的イスラーム観と類似していることを示唆している。²⁴ そして、レイン自身も『当世』の「宗教と法」の章の末尾でワッハーブ主義にふれ、それを主唱したムスリム法学者、イブン・アブドゥルワッハーブを「敬虔で学識のあるシャイフ（学者）」と記し、ワッハーブ派の「宗教教義はいまでも多くのアラブ人に信奉されており、エジプトのもっとも学識のあるウラマーによって正統的なものと認められている」と記している。²⁵ ヴィクトリア朝時代前夜のナイル河谷において、今日のイスラーム主義にもつながる教義が、ムスリムの一部でかなり肯定的に受けとめられていたことを示すひとつの史料である。

冒頭で取り上げたもうひとりのエドワード、サイドとの関連でも後日譚を紹介しよう。彼が学んだエジプトのヴィクトリア・カレッジ、そこには多くのアラブ人エリート、例えば、イラク、サウディアラビア、クウェイト、さらにフセイン前国王も含むヨルダンなどの王族の子弟が学んでいた。そのリストの中にはスーダン人も見出しうる。例えば、スーダン・マ

フディーの忘れ形見で、共同統治体制下でマフディスト勢力の復活に尽力したアブドゥルラフマーンの息子（名前は特定されていず）や、アブドゥルラフマーンの孫であり現在のマフディスト勢力の指導者でありまたかつてスーダン首相を務めていたサーディク・マフディーもヴィクトリア・カレッジで学んでいた。その一方で、マフディー運動の時期にマフディストに敵対していたスーダンの一大スーフィー教団、ハトミー教団の指導者一族、ミールガニー家の青年たちも籍を置いていた。²⁶ ヴィクトリア朝時代に敵対していたスーダン人たちの子弟が、時を経てヴィクトリア・カレッジでともに学んでいたのである。歴史の流れを感じさせる挿話である。

さてそのヴィクトリア・カレッジであるが、現在では公立学校になっている。1989年、放校されてから38年の後に、家族を伴ってかつての学び舎を訪問したサイドが、周辺地域の変わり具合に驚き、さらに校舎に入ろうとしてヴェール おそらく頭巾状の髪覆いだろう を被った女性校長にけんもほろろに追い出されるエピソードは、『遠い場所の記憶』に印象深く記されている。²⁷ 実はヴィクトリア・カレッジは、56年のスエズ戦争を契機に次第に「エジプト化」が進められ、57年には名称も「ヴィクトリー」・カレッジに変更されていた。²⁸ スエズ戦争でイギリスが失ったのは、運河に関わる権益のみではなかったのである。

* 本稿は、2003年11月22日に駒澤大学で開催された「日本ヴィクトリア朝文化研究学会第3会大会」での講演草稿に大幅な加筆を行ったものである。講演の機会を与えてくださった松村昌家会長をはじめとする学会理事会の諸先生、そして仲介の労をとってくださり本論文草稿にもいくつかの貴重なコメントを下された井瀬久美恵教授（甲南大学）に篤くお礼を申し上げる。

註

1. Edward. W. Lane, *An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*. 同書はその後さまざまな出版社から版を重ねて刊行された。レイ

- ン研究者 Jason Thompson はその中でも1860年に刊行された第5版を決定版として、その復刻版を2003年にThe American University in Cairo Press (Cairo) から刊行した。本稿のテキストはそれを用いる。
2. ヴィクトリア・カレッジについては、Sahar Hamouda and Colin Clement eds., *Victoria College*, (The American University in Cairo Press, 2002)を参照。なお、サイドが通っていたのはカイロ校である。ここであげたサイドのテキストは邦訳されている。『オリエンタリズム』(板垣雄三・杉田英明監、今沢紀子訳、平凡社、1986年)、『遠い場所の記憶 自伝』(中野真紀子訳、みすず書房、2001年)。
 3. レインの仕事の紹介と、人類学におけるその評価に関しては、拙稿「二人のエドワードと二〇世紀人類学」(栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験』人文書院、1999年、所収)参照。同論文は、本稿の議論の一部と重なり、その論旨を補足するものである。
 4. John Barrel, “Death on the Nile”, in Catherine Hall ed., *Cultures of Empire*, (Manchester University Press, 2000), p.189.
 5. Geoffrey Roper, “Texts from Nineteenth-Century Egypt”, in Paul Starkey and Janet Starkey eds., *Travellers in Egypt*, (I. B. Tauris, 2001), p.248.
 6. 『オリエンタリズム』160頁。
 7. 前掲書、164 - 65頁。
 8. 前掲書、167頁。
 9. John Rodenbeck, “Edward Said and Edward William Lane”, in P. Starkey and J. Starkey eds. *op. cit.*, pp.238-39.
 10. フィールドワークを重視する「20世紀」人類学 = 民族誌学をブランイスラフ・マリノフスキーで代表させ、その問題点を指摘したものとして、拙稿「フィールドワークと民族誌の現在」(拙著『いまを生きる人類学』中央公論新社、2002年、所収)がある。
 11. シェリー・ワリア『サイドと歴史の記述』(永井大輔訳、岩波書店、2004年)56 - 7頁。
 12. ジェイムズ・クリフォード「『オリエンタリズム』について」『文化の窮状』(太田好信他訳、人文書院、2003年)所収、328頁。
 13. 例えば、『パレスチナ問題』(杉田英明訳、みすず書房、2004年)。
 14. J・クリフォード「民族誌的権威について」前掲『文化の窮状』所収。
 15. 興味深いことに、クリフォードは先にあげた『オリエンタリズム』の書評論

文（注12参照）において、サイドのレイン批判にはまったく言及していない。

16. 時代は下るが1930年代に、視察に来たエジプト王族の演説を聞いた工場労働者たちは、その内容を理解することができず、彼は外国語を話しているのではないかと訝ったという興味深い挿話がある。その王族は、一族内の多くの人々と同様に、子供時代をヨーロッパで暮らし、ドイツ語で教育を受けたためにアラビア語能力は充分でなかった。まして、満足な学校教育を受けていなかった当時のエジプト人の大多数が理解できなかった「正則アラビア語」をくちごもりながら話したため、労働者にとってますます意味不明の言葉になってしまったのである(Joel Beinin, *Workers and Peasants in the Modern Middle East*, Cambridge University Press, 2001, pp.106-07)。
17. 1859年に英探検家ジョン・スピークによって「発見」され、女王に因んで名づけられた。
18. 以下にふれるスーダン・マフディー運動の概略に関しては、拙著『テキストのマフディズム』（東京大学出版会、1995年）参照。
19. イスラーム暦1300年は、西暦1882年11月から始まった。なお、18～19世紀アフリカにおけるマフディー待望の気運やそれを奉じた抵抗運動に関しては、拙稿「第3部 イスラームのアフリカ」（福井勝義、赤阪賢、大塚和夫『世界の歴史24 アフリカの民族と社会』中央公論社、1999年）参照。
20. ヴィクトリア女王はゴードンの死から1カ月も経たないうちに彼の妹メアリーに私信を送り、深い哀悼の意を表した。その中で女王は、彼をスーダンに派遣した人々（グラッドストーンたち）に対し、絶え間なく頻繁にゴードンの救援を要請していたと記している。返礼としてメアリーは、ゴードンの愛用していた聖書を女王に贈り、女王はそれに対しても礼状を書いた(Barbara Harlow and Mia Carter eds., *Imperialism and Orientalism*, Blackwell, 1999, pp.304-05)。この挿話を含め、イギリス世論のゴードンの死をめぐる動向の一端は、アラン・ムアヘッド『白ナイル』（篠田一士訳、筑摩書房、1970年）253 - 57頁を参照（ただし、メアリー・ゴードン宛のヴィクトリア女王の手紙は、一部が略されている）。なお、『白ナイル』にみられる「オリエンタリズム」に関しては、前掲拙著『テキストのマフディズム』49 - 63頁参照。また、英政府に批判的な同時代のイギリス人の見解としては、ウィルフリッド・S・プラント『ハルツームのゴードン』（栗田禎子訳、リプロポート、1983年）がある。同書につけられた板垣雄三の解説も参考になる。
21. 18世紀末に（フランスなどで）創出された文化的人造物としてのナショナリ

ズム、そしてそれが「モジュール」として、(欧米以外の)多様な土壌に多少なりとも自覚的に「移植」されていったという表現は、ベネディクト・アンダーソンに拠る(『増補 想像の共同体』白石さや・白石隆訳、NTT出版、1997年、22頁)。

22. 「イスラーム主義」の定義、ならびにここでふれられるさまざまな運動の概観については、拙著『イスラーム主義とは何か』(岩波書店、2004年)参照。
23. ただし、現在のスーダン・マフディスト、すなわちマフディー一族によって指導される政党、ウンマ党の支持者は、タクフィールのような過激な思想をもってはいない。
24. Leila Ahmed, *Edward W. Lane*, (Longman, 1978) p.113.
25. Lane, *op. cit.*, p.100.
26. S.Hamouda and C. Clement eds., *op. cit.*, pp.74, 169, 183.
27. サイド、前掲書、245 - 46頁。
28. S.Hamouda and C. Clement eds., *op. cit.*, p.200

(東京都立大学教授)

The Victorian Age and the Islamic World in the Nile Valley

Kazuo OHTSUKA

As a social anthropologist whose main field of research has been among Arabic-speaking Muslim peoples, I remember two “Edwards” when I heard a word, the Victorian Age. The first is Edward W. Lane, who published his detailed “ethnography” of the Egyptians, *The Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*, in 1836, one year before the Queen’s enthronement. The second is Edward W. Said, who harshly reproached Lane in his polemical work, *Orientalism*. Said is not a contemporary with Lane and other Victorians but registered, if in short term, at the Victorian College in Egypt, which established in 1902, one year after the Queen’s death, and named after her.

In this paper, I point out Said’s criticisms against Lane and their connections with an issue of writing an ethnography or culture in the anthropological circle today. Though I accept seriously some of Said’s severe comments on anthropological activities and works, I finally defend a fieldwork method to study “positively” culture and people of a society, as Lane ingeniously did.

The second part of the paper deals with two “revolutions” which started in the same year, 1881, in Egypt and the Sudan. The Urabi revolution in Egypt was a first secular “nationalist” attempt to resist foreign rule over the country, though it lasted only less than two years. On the other hand, the movement led by the Sudanese Mahdi (the Islamic Messiah) successfully defeated the British colonial power and governed most parts of the Sudan for more than ten years. It is said that the Mahdi movement is the first nationalistic activity in the Sudan. Based on an analysis of Mahdists’ ideology, I argue that the movement is, mainly not exclusively, a religious one derived from the traditional or classic ideas of Islam. It has more

resemblance, then, to the pre-modern Islamic reformist activity like the Wahhabism than the nationalist movement like the Urabi revolution. These two movements, taken place in the Nile Valley in the heyday of the Victorian Age, have relevance to the nationalist and Islamist activities in the modern Muslim world.

* This article is based on the paper I read at the Third Annual Conference of Society for the Victorian Cultural Studies in Japan on 22 Nov. 2003 at Komazawa University, which I widely revised for the publication. I greatly appreciate Professor Masaie Matsumura, its president, and other members of the executive committee for giving me such an opportunity, and Professor Kumie Inose(Konan University) for reading this article and giving several comments on it before publication.

The Victorian Womanhood Reflected in Ariel Paintings

Noriko TAKAGI

The aim of this paper is to re-examine the Victorian womanhood through Ariel paintings in the nineteenth century. Though William Shakespeare specified that Ariel is a male character in *The Tempest*, many Victorian painters portrayed feminine Ariels on canvases. We will investigate the Victorian subconscious which the painters challenged to disclose in a uniquely individual way.

First, the focus will be on what John Anster Fitzgerald tried to represent in his painting, *Ariel*: Ariel's image of an "angel" and the image of Victorian